



三宅島大学
MIYAKEJIMA UNIVERSITY

山城大督 三宅島映像プロジェクト

VIDEO LETTERS

ビデオレター：7年後の「わたし」へ

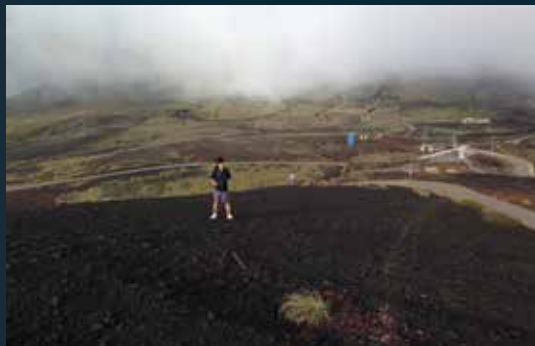


東京文化発信
プロジェクト



おも
時を憶う





一つの島を舞台にした わたし宛てのビデオレター





わたしの いつかの日常からの手紙

山城大督 (三宅島映像プロジェクト・ディレクター)

この島を巡るといつも、「時間」について考える。この大きな岩はいつから「ここ」に存在していたのだろう。2000年前に出来たこの噴火口の穴は、いつから池になったのだろう。この巨樹は何度枯れ、何度再生し、島のどれだけの歴史や人々を見つめてきたのだろう。島のあらゆる風景には、人間では到底太刀打ちできない力や時間が当たり前の顔をして存在し、途方もない「時間」が僕たちの隣に流れている事を思い知らせてくれる。

僕がこの島を初めて訪れたのは、震災による災害や原発事故のショックで「日常」について再考する日々が続く2011年6月だった。2000年に起こった噴火による三宅島全島避難のニュースは、当時大阪の高校生だった僕はどこか遠い場所で起こっているように感じていたと記憶している。三宅島はどんな島でどんな人が生活しているのか正直想像ができなかった。そんな僕にはこの島に何かの「答え」があるような気がしていた。災害から十年が経過し帰島を経験した人々から、「わたし」とは、「わたしの場所」とは、「故郷」とは何か、「日常」とは何か。当時も今も、自分が探している解答を教えてもらえるような気がしていたのかもしれない。

2013年、初めての滞在から二年が経過し三宅島で映像のプロジェクトを立ち上げるようになった。まずはあらためて島のリサーチを行い、「三宅島を舞台に映像を撮るなら何を撮るか」を考える事から始めることにした。有佐祐樹、戸舘正史、富田了平をプロジェクトメンバーに迎え、当初は「島でシナリオを考え映画を撮影する」「島で島民参加のイベントや出来事を実施し映像化する」「島の自然の移り変わりを美しい映像で記録する」等のアイデアが出た。そんな

中で、僕たちは「人」にスポットが当たる映像を撮影をするべきではと考え、議論を進める中で「7年後の自分に送るビデオレターの撮影」という手法を選択してみることにした。「今」を生きる人々の言葉を紡ぎ、見つめる事で「過去」を知り、ほんのちょっと先の「未来」を考え、僕たちが存在する「今」や「日常」について、中期的な時間をかけてアクションを起こせるのではないかと考えたのだ。

撮影を進めて行く中で、この撮影によって撮られた映像は、上映会やインターネットなどで広く公開しないという事にした。ビデオレターはプライベートな内容が多く、あくまで「わたしへの手紙」であり、公開するという前提によって、ありのままの姿が撮影できないと考えたからだ。また、内容に重点を置くのではなく、未来に向けたビデオレターの撮影を行っているという「行為」に重きを置いたと言える。ちょっと先の未来から「今」という時間を見つめる「視点」を創出する事が、このプロジェクトの本来の目的だと考えた。

公開しないプライベートな映像を撮影し続ける事に、戸惑いや葛藤があったのも事実だ。個人間でのコミュニケーションのために撮影される映像は、あまりにも素朴。各家庭において撮影されるホームビデオ以上の価値があるのだろうか。自問自答する時間が長く続いた。しかし撮影を続けていく中で、公開しない映像の持つ強度を僕は見つけたように感じている。映像はそのメディアの特徴から多くの人が閲覧する事に長けていて、撮影される事＝パブリックになる事、という印象が強くあると言える。近年はSNSや動画共有サイトの普及によって、さらにその意識は強くなっている傾向にある。今回のビデオレターは基本的にまだ見ぬ未来の自分に向けてることで、撮影さ

れる人々がパブリックな「よそ行き」の態度ではなく、ありのままの自分としての姿や表情を見せてくれるようになった。その姿は未来を見る現在の自分、今や過去を振り返る、自身の人生の姿だった。その姿からは、わたしの話、家族の話、三宅島の話、噴火・災害の話、現在の話、希望の話、各々の視点で語られた今の時間の記録となっていた。僕はその姿が映った映像に強く惹かれていった。

撮影を続けるうちに、実際に撮影された映像が7年後に再生される日を何度も想像した。どこで誰と見ているのだろう。どんな感情で7年前の自身の姿を見つめるのか。何が変わって何が変わらないのだろう。撮影した数だけ、それぞれの時間が流れて行く。そこにはフィクションではない現実の一つの時間の流れが、この映像を起点に始まって行くような気がした。

いつかの日常(わたし)から届く手紙は、開封されるその日を待っている。そう、その瞬間こそが、「手紙／ビデオレター」としての効果を発揮し、このプロジェクトの本来のスタートになるだろう。未来の時間から「今」を見る視点こそ、このプロジェクトの全てなのだと考える。このプロジェクトは始まったばかりなのだ。

山城大督：美術家。映像ディレクター。1983年生まれ。映像の概念を空間やプロジェクトへ展開し、その場でしか体験できない《時間》を作品として展開。岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー (IAMAS) 修了、京都造形芸術大学芸術学部卒業、山口情報芸術センター [YCAM] エデュケーターを経て、東京藝術大学大学院映像研究科博士後期課程在籍。京都造形芸術大学、明治学院大学 非常勤講師。「Nadegata Instant Party (中崎透+山城大督+野田智子)」メンバー。



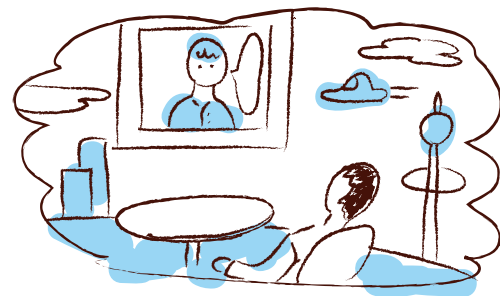
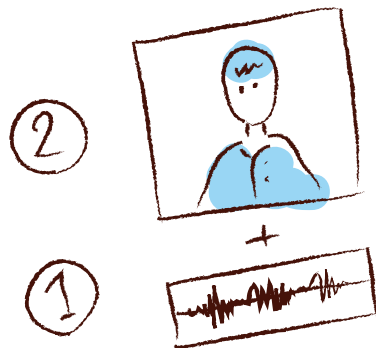
『VIDEO LETTERS』の撮影法

1 7年後の「わたし」に宛てた声を録音



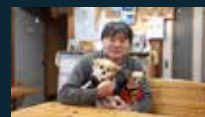
2 録音した声を聞く姿をビデオで撮影

3 声の録音と映像を編集しDVD作成



4 7年後に鑑賞する





わからない未来に託す～時間が錯綜するフーガとして

戸館正史（三宅島映像プロジェクト・メンバー）

昔はよくあったことだが、電話をしている相手の電話口から自分の声が少しだけ遅れて聴こえてくるタイム・ラグ。現在の自分と少しだけ前の自分が追いかけてっしている感じ。その一瞬のタイム・ラグで感じる気恥ずかしさ。こういった体験は誰しもあるかもしれない。《VIDEO LETTERS》の制作現場では、被写体が自らの音声を録音して、それを聴きながら撮影するまでのタイム・ラグは長くて10分程度であったが、撮影された当事者たちの感覚としてはリアルタイムで自分自身の体験を重ねて追体験することに近い。それは音楽というならば、時間体験のカノン（輪唱）のようなものかもしれない。カノンでは元の旋律を模倣しながら続いて旋律が追いかけていくわけだが、《VIDEO LETTERS》は異なる性質の時間＝旋律をパッケージしたものであって、もしかしたらカノンというよりも、主旋律（＝現在）と異なる旋律（＝過去や未来）が自由に展開していくフーガに近いかもしれない。それも7年の歳月を前提とした複数の時間体験を紡ぐ壮大なフーガだ。

《VIDEO LETTERS》を時間論として構造的に把握するための前提として例えばアンリ・ベルクソンを引用するとどうだろう。この哲学者による有名な時間論を乱暴に単純化してみると、わたしたちが日々時間に追われていると感じる際の秒針がカチカチと規則的に刻んでいく時間は、物質空間の中で便宜的に整理された「空間化された時間」であって、数値化や計測が可能ではない意識的に感得できる持続的な流れこそが「純粋な本来の時間」であるということになる。《VIDEO LETTERS》で山城大督が試みていることは、実はベルクソンの時間論で説明できるところがある。まず、3分間という時間を与えて録音する

ことはまさに物質的に刻まれた「空間化された時間」そのものであるということ。そして、その録音された音声を聴きながら撮影される時間体験は、気恥ずかしさや自意識が被写体を占有して、あたかも面接官を前にしたときのシドロモドロな時間の流れのように、時計で管理された録音時の時間体験とは別のものとなる。これは本人にとっては計測できない「純粋な本来の時間」の体験と言えるだろう。作品ではこのような異なる性質の時間体験を映像として構造化して、さらにそこにはもうひとつの時間への眼差しがパッケージされる。言うまでもなく「7年後の自分」という未来への眼差し、7年という時間の長さへの意識である。7年後の世界を語ったり、家族へのメッセージであったりと、未来という時間の言語化は被写体それぞれ異なるが、いずれにせよ具体的な未来に対する各人の意識が発せられた音声だけではなく、それを聴いている当人の表情や身体からうかがい知れる。ここであうかがい知れるのは時間への意識というよりも、いま現在抱く大事な人や発展する余地のある出来事や価値に対する願望のようなものであるかもしれない。

そしてこのパッケージされた映像を7年間の封印の後に観るという行為をもってして《VIDEO LETTERS》は完成する。7年の間に起こる生活や社会環境の変容、そして被写体であり同時に7年後の鑑賞者になる自身の変化などによって《VIDEO LETTERS》はパッケージ時とは異なる意味が付与されていく。いわば7年後に映像を観る当事者に対してどういったインパクトを喚起することになるのかという予測不可な効果、すなわち観る者がそこで得得であろう像＝イメージに作品の価値が託されている（はからずともベルクソ

ン・ドゥルーズの線で《VIDEO LETTERS》を説明してしまいスノップで嫌なのであるが、山城大督の映像作家としての常なるアプローチは先人たちの思想を無意識的かつ雑駁に炙り出しており、個展《VIDERE DECK/アイデア・デッキ》(2013年アサヒ・アートスクエア)における「時間」と「場所」への眼差しにも通じている。

閑話休題。

《VIDEO LETTERS》は山城大督の作家としての固有の作品であることは言うまでもないが、彼のもうひとつの顔であるアートユニットNadegata Instant Party (中崎透+山城大督+野田智子)と同様に、いわゆるプロジェクト型の制作システムを採っている。もちろん、三宅島大学というプロジェクトのなかでの位置づけとなっているわけで、三宅島大学としてすでに構築されたネットワークに乗ったうえでの制作システムだ。よって《VIDEO LETTERS》で作品の素材となる被写体は当然ながら三宅島に暮らす人たちであり、彼女らはある意味において「時間」を体験する「場所」を共有しているとも言える。幾人かの島民にとっては、来るべき三宅島火山の噴火を7年後という未来の設定において共有しているかもしれない。あるいは2020年の東京オリンピック開催という未来を共有しているかもしれない。明らかに起こり得る現実味を帯びた未来を待つことと、予見のできない未来を眺望することではまったく異なる心象を持つことになるが、現在と未来の以前に事実としての過去が誰しにもあることは間違いない。

《VIDEO LETTERS》では、事実として積み上げることのできる過去の時間の証明は、被

写体それぞれから確認することができる。数分前の自らの音声に耳を傾けている身体は、それよりさらに以前の過去との持続的な時間体験の内にあるからだ。人間が過去とは決別できないことは、時間体験以前に過去を記憶として抱え込むことで明らかである。では、現在の目に見えないさまざまな事実、例えば沸々とする火山のマグマであったり、フクシマからの空気であったり、声にならない社会への渴望であったりを《VIDEO LETTERS》はすくい上げているだろうか。被写体がそれらについて直接的な言及をしない限り、現時点ではパッケージされていないかもしれない。しかしながら、時間を経ることで事実は必ず可視化されるという歴史学的な視座を信じるならば、7年という歳月は、いまは目にできない事実を、被写体そしてわたしたちの記憶の内に上書きしていくに違いない。複数の時間体験が錯綜する《VIDEO LETTERS》というフーガは、主旋律の下で独立して執拗に暗躍する通奏低音=事実によって価値が変容していくはずだ。それが幸せなことなのか、不幸せなことなのか、いまはわからない。

戸館正史：文化政策・アートマネジメント。NPO法人アートフル・アクションのプロジェクト・ディレクションをはじめアーツカウンシル東京アーツアカデミー調査員などを兼務。1977年生まれ。法政大学文学部哲学科卒業。出版社勤務を経て、静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科修士課程修了。2007年から2012年まで月見の里学遊館企画スタッフ・アートマネージャー。日本文化政策学会、演劇人会議各会員。共著に『芸術と環境』(2012年、論創社)などがある。



2種類の異なる記録

富田了平 (三宅島映像プロジェクト・メンバー)

本プロジェクト《VIDEO LETTERS》で制作された映像は観る者に対して、どこか感傷的な印象を与える。映像に写されている人々の身振りや声は、現在性のあるものではなく間違いなくそれが「過去に録音／撮影されたもの」であるということを意識せざるをえなくする。本作では、音声と映像が別々に撮影された。参加者はまず個室に録音スタッフとともに入り、7年後の自分に宛てた3分間のメッセージを録音する。そのあと別室で、録音した音声をスピーカーで流し、他の参加者やスタッフとともにそれを聞く。映像は他の聴衆とともに自分の音声を聞く際の参加者のリアクションを記録する。そのようにして採集された映像と音声編集によって同一の時間軸に並べられた。しかし、2つの記録はそれぞれ異なる性質を持っている。音声は参加者が7年後の未来を志向した〈意識〉の記録である。個室で返答の返ってこない録音機に向かって話す状態は、相手からの応答を期待しながら図らずも留守番電話に一人語りをするときの、身体への意識が疎くなり話すことだけに意識を集中した状態に似ていた。また、録音は参加者の胸元にビンマイクを取り付けて行った。これによってマイクに向かって音声を吹き込むときの、録音することへの緊張感が低減され、より自然な状態で録音することができたのではないだろうか。録音機に向かってメッセージを投げかけるというよりも、自らと向かい合い、言葉を紡いだそうとする3分間の内面の運動が記録されることとなった。

に対して映像はビデオカメラを前にして座っていた3分間の身振り、しぐさの記録である。ほんの数分前

に録音した個人的な内容のメッセージを他の参加者やスタッフとともに聞くと、照れ隠しに笑ったり、視線が宙を泳いだり、カメラに対してピースサインを送ったりする。それらの身振りは他者に対するもので、自らは正しく認識することができない。他者の間で共有された参加者の外側の記録である。7年もの時間が経てば髪型や服装はもちろん、皮膚の質感、指先や顔の筋肉の動かし方も変化する。映像は紛れもなくカメラの前に座っていた3分間の〈あの日の身振り〉を記録している。

7年後の未来を志向する音声トラックと、過去の身振りが記録された映像トラック。この2つによって、2013~14年に3分間を過ごした参加者の内面の動きと身振りをそれぞれ克明に記録している。

小学生が卒業時などに作るタイムカプセルの一般的なイメージだと、とくに関係のないさまざまなものが一つの容器にバラバラと入れられる。それと同じように本作では、音声トラックと映像トラックの独立した2種類の記録がひとつのタイムカプセルに投げ込まれている。7年後に本作を見返すとき、写真や日記などにも増してリアルに記録された〈あの日の3分間〉と対峙することとなるだろう。

富田了平：写真、映像撮影者。東京藝術大学大学院修士課程修了。アートプロジェクトや舞台芸術の映像記録、写真記録のほか、共同での映像作品制作などを手がける。

7年後の未来へ

吉田武司 (三宅島大学プロジェクト実行委員会 事務局)

高度情報化社会の今、撮影されることへのリスクは大きい。いつ、どこで、誰に撮られ、どのように公開されるか分からないからだ。そして、映像には人を晒す・暴く力がある。それゆえ、多くの人は他人にカメラを向けられることに拒否反応を示すのだろう。2000年の噴火で大勢のマスコミが大挙した三宅島の人は、その力をより理解しているかもしれない。

山城大督を中心に4名で結成された三宅島映像プロジェクトチームが三宅島で展開したのは《VIDEO LETTERS》。タイトルの通り、このプロジェクトは7年後の自分に宛てるビデオレターを撮影するプロジェクトで、5月のリサーチ、10月から2月にかけて計5回の滞在を経て、34名のビデオレターを撮影した。リサーチ時には、撮影されることに対してネガティブなイメージを持っている、と取材先や島内で出会った方々から伺っていたにも関わらず、なぜ34名ものビデオレターを撮影出来たのだろうか。

おそらくその理由は、山城が2000年のマスコミのように「撮り逃げしたくない」と言うように、無理に作品公開を目的にせず、まず島の人と向き合うことから始めたからではないだろうか。具体的には①映像と音声を分けて記録するという、そして②原則非公開とし、③撮った映像はDVDとして本人にのみ手渡すということ。このプロセスを経ることで、公開する権利を参加者に委ねて、不安を取り除き、話しやすい環境を作ったのだ。

先に1人で音声を録音し、その音声を聞いている姿を撮影することによって、参加者はカメラに演じることもなく、より自分と向き合える環境が用意される。緊張しながらも敢えて他人には言わない家族のことや自分のこと、

また三宅島の未来についてゆっくり、丁寧に言葉を選びながら話し始める。その内容はとてもプライベートだ。自分と向き合う環境と、非公開を前提としているからこそ綴られた言葉だということが分かる。撮影を終えた参加者は「未来を考える良い機会になった」と清々しくも照れくさそうにはにかむ。忙しさに追われ、忘れがちになってしまう日々「7年後の私」という具体的なテーマを与えることで、ぼやけた「未来」に輪郭を与えてゆく。

「未来」を考えることは「今」を考えることにつながる。そして、その経験が参加者自身も知らなかった別の「私」を垣間見せていたようだ。「自分でも想像していなかった言葉がでた」というのは、おそらく普段頭の片隅で考えていたことが、この撮影をきっかけに出てきたのだろう。7年後に宛てるはずのビデオレターは、別の「私」を気付かせるきっかけでもあったのだ。

参加者の多くは「自分を振り返る良い機会になったから」と次の参加者に友人を紹介してくれる。「撮り逃げ」するのではなく、真摯に向き合ったからこそ、つながりの連鎖が生まれ、短期間で34名もの撮影をすることができたのかもしれない。

このプロジェクトは、三宅島映像プロジェクトチームにとって、そして参加者にとってまだ始まったばかりだ。今後、参加者も100人、200人と広がっていくかもしれない。そして、撮影されることがポジティブに変わっていく可能性だってある。プロジェクトはここで完結することではなく、7年後までさまざまな可能性を残しながら、参加者の中で継続されていく。



プロジェクトのあゆみ

第一回滞在 2013年5月9日-14日

大路池・新鼻新山・雄山など島内各所を巡る。三宅高校・三宅中学校訪問。

お宅やお店に訪問し島での生活についてインタビュー、ロケハンなど。

第二回滞在 2013年10月5日-10日

三宅島大学本校舎にてワークショップ「ビデオレターを撮影しよう」全四回実施。

ご自宅での出張ビデオレター撮影を開始。

第三回滞在 2013年12月6日-12日

三宅島大学本校舎にてワークショップ「ビデオレターを撮影しよう」全二回実施。

前回撮影した参加者からの紹介でビデオレター撮影者が増え始める。出張ビデオレター撮影を継続。

第四回滞在 2014年1月18日-22日

三宅島大学本校舎にてワークショップ「ビデオレターを撮影しよう」全二回実施。

出張ビデオレター撮影を継続し参加者合計が30名を超える。

第五回滞在 2014年2月8日-11日

三宅島大学本校舎にてワークショップ「ビデオレターを撮影しよう」全一回実施。出張ビデオレターを継続。

山城大督 三宅島映像プロジェクト

プロジェクト・ディレクター：山城大督

プロジェクト・メンバー：有佐祐樹、戸館正史、富田了平

三宅島大学マネージャー：塩野谷卓、上地里佳

三宅島大学プロジェクト実行委員会 事務局：吉田武司

主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、

三宅島大学プロジェクト実行委員会、三宅村

協力：『VIDEO LETTERS』撮影参加者の皆さま

ドキュメント | 山城大督 三宅島映像プロジェクト『VIDEO LETTERS』ビデオレター：7年後の「わたし」へ

編集：山城大督

写真：富田了平、山城大督、有佐祐樹

デザイン：有佐祐樹 (marq mew)

発行・お問い合わせ

平成26年3月

東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）

〒130・0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階

TEL：03-5638-8800 Fax：03-5638-8811

E-mail：info-ap@bh-project.jp

© 東京文化発信プロジェクト室 © 山城大督

本書は「東京アートポイント計画」の一環として実施されている「三宅島大学」のプログラム「三宅島映像プロジェクト」の成果物として作成されました。なお、三宅島大学は平成25年度をもって終了します。本書については、上記お問い合わせ先までご連絡ください。

三宅島大学

「三宅島大学」は、三宅島全体を〈大学〉に見立てて、さまざまな「学び」の場を提供する仕組みです。自然との長い関わりについて考え、私たちの「想う力」を育む場です。学校教育法上で定められた正規の大学ではありませんが、〈大学〉の講座やプログラムを通じて人びとが出会い、のびのびと語らう「学び」の場をデザインし、コミュニケーションの誘発を試みるプロジェクトです。
www.miyakejima-university.jp

東京アートポイント計画

「東京アートポイント計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。
www.bh-project.jp

